

1. 沿革

(1) はじめに

神奈川大学日本常民文化研究所は、その前身が澁澤敬三の主宰したアチックミュージアムであることは、多くの知るところである。その創設から、今年でちょうど80周年を迎える。澁澤敬三の個人的な研究から始まったアチックミュージアムは、財団法人日本常民文化研究所を経て神奈川大学に移管され、現在に至っている。その活動は、民具や漁業資料の収集を通して民俗学の研究のみならず、歴史学の研究にも大きく寄与してきた。この80年の歴史を通して、日本常民文化研究所を取り巻く人々の世代交代が行われ、また、時代の変化とともに、その活動や学界における役割もいくつかの段階を経て変化してきた。

日本常民文化研究所の成果をどのように継承し、さらに現代においてどのような役割を果たすべきなのか。その一つの方向性を示すものとして、2009年度から文部科学省の「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」に採択され、共同研究拠点として国際常民文化研究機構（以下、機構という）が神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研という）を基盤として発足した。

機構発足までの経緯について、アチックミュージアム時代から常民研までの沿革の概略を示し、さらに機構発足前後の経緯を整理する。

(2) アチックミュージアムから日本常民文化研究所

澁澤敬三は、銀行家であり実業家である祖父の澁澤栄一に懇願されて、その跡を継ぐべく東京帝国大学経済学部に入學した。しかし敬三は、生物学者になる自分の夢を捨て切れずに、自宅邸内にあった物置小屋の屋根裏に自分で収集した動植物の化石コレクションなどを陳列した。そこに集まっては、友人たちとその陳列物をめぐって議論を交わした。1921（大正10）年がその第1回会合という記録があり、これがアチックミュージアム（以下、アチックという）の始まりである。

大学を卒業して横浜正金銀行に就職した敬三は、1922（大正11）年から1925（大正14）年までロンドン勤務を命じられる。その間、欧州各地の博物館をめぐり、その経験はその後のアチックの活動に大きな影響を与えることになったと思われる。

ロンドンから帰国した敬三は、柳田國男と出会い、そして柳田から早川孝太郎を紹介される。この出会いによって、アチックの活動も大きく変化していくこととなる。まず、敬三は、早川の郷里である奥三河の花祭り調査を支援した。それだけでなく、敬三自身も花祭りの調査や保存に関与していく。1929（昭和4）年に、敬三は早川とともに花祭りを見学し、その祭りに魅せられて、7年間花祭りに通う。その間、折口信夫、今和次郎などの知識人を伴い、また宮本馨太郎、有賀喜左衛門などの若い研究者も巻き込んでいく。それだけでなく、現地の人々との交流を大切にしたい。このように、敬三は研究を通じた仲間を大切にしたい。アチックの始まりも、仲間との交流であった。このチームワークで研究を進めるといふ研究方法は、その後も常民研の活動の基本となっている。

花祭りの研究は、早川によって1930年に『花祭』としてまとめられる。それは、単なる記述による記録ではなく、自分の分析をふまえて書かれた民俗芸能のモノグラフであった。その研究視点は、その地域の個性を重視し、事象を構造分析と象徴的意味によって把握した独自の研究であると評価される。当時、民俗学の体系化と理論化、そして研究体制の確立を目指していた柳田國男が民俗学徒に求めたのは、資料の収集であって、独自の分析ではなかった。柳田民俗学の動向と異なる研究方法と成果が、その後もアチックミュージアム彙報として刊行されていく。1934（昭和9）年刊行の竹内利美『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌』から始まって、合計60巻が刊行されている。地方、中央を問わず、個性を尊重した、研究者の育成として評価される。

敬三の「花狂い」は、さまざまな成果を残している。当時はまだあまり普及していなかった16ミリフィルムで、自らカメラを回して花祭りを記録している。1930年頃から1939年頃にかけてアチックの調査が盛んに行われると、花祭りに始まる16ミリフィルム記録は各地に広がり、その足跡は満州、朝鮮多島海、台湾にまで及んでいる。それだけでなく、昭和初期に撮影された約9000枚もの写真は、16ミリフィルムと合わせて、貴重な民俗映像記録となっている。

アチックの研究上の特徴は、民具研究と漁業史研究である。民具研究は、ロンドンから帰京した敬三が、仲間と始めた郷土玩具の収集と整理から始まった。花祭り調査を行なう早川孝太郎は、奥三河で津具郷土史料保存会と出会う。郷土の生活用具の収集と保存を行なう津具郷土史料保存会の活動は、早川を通してアチックの民具研究に影響を与えた。早川は、民具に対する概念規定を整理して『蒐集物目安』を著わし、その後のアチックにおける民具研究の方向性を明らかにした。

1935（昭和10）年に6000点を超えていた民具コレクションは、1939（昭和14）年に保谷の日本民族学会附属博物館に移管される。これは、敬三が北欧で見た野外博物館をイメージした「日本民族博物館」構想の準備段階と考えられるが、その構想は、1977（昭和52）年に開設された国立民族学博物館に引き継がれ、敬三が収集した約20000点の民具は、そこに移管されている。他方、民具研究は、常民研が引き継ぎ、1968（昭和43）年から現在まで『民具マンスリー』を常民研が発行している。

漁業資料の収集と研究は、『豆州内浦漁民史料』との出会いから始まるといえよう。敬三は、大の釣り好きであった。1931（昭和6）年に祖父澁澤栄一が逝去し、その後の事務処理などの過労がたたって急性糖尿病を発症し、伊豆の内浦三津に5か月ほど病氣療養のため逗留する。その時に、偶然旧家大川家の土蔵から膨大な古文書を発見する。この出来事を、敬三は「古文書を釣る」と表現している。洒脱な言い回しだが、釣り人は自分の釣ったものに敬意をもつ。あるいは、研究の魚群を発見したと思ったかもしれない。その後、これを整理、編集して、アチックミュージアム彙報として3巻4冊刊行する。これを契機に、アチックに漁業史研究室が設けられ、若手の研究者を集めて漁業史、水産史の研究を本格化する。

民具と漁業・漁村を中心としたアチックの研究活動は、アチックミュージアム彙報・ノートを見ると、1935（昭和10）年前後から1943（昭和18）年頃までがピークであった。時局の要請によって、1942（昭和17）年に日本常民文化研究所と名称を改めている。

この年、敬三は乞われて日本銀行副総裁として政界に転じ、日銀総裁として終戦を迎え、すぐに大蔵大臣として戦後処理に携わる。さらに、公職追放の憂き目に遭い、その間常民研の活動も休眠状態になっていた。

（３）財団法人日本常民文化研究所から神奈川大学日本常民文化研究所へ

公職追放の状況でも、敬三は学問の基礎となる史料の消滅を恐れ、その保存に力を注いだ。アチックで集めた史料は、文部省史料館と水産資料館に無事移管された。また、消滅しつつある全国の民間にある古文書の収集と保存については、とくに漁業資料整備事業が国家予算で行なわれることになった。その受け入れ機関として、桜田勝徳を理事長とする財団法人日本常民文化研究所が1950（昭和25）年に開設された。漁業制度資料収集の事業は、月島の水産研究所の一室に常民研月島分室が置かれ、若い研究者を集めて膨大な漁業資料が収集された。古文書の筆写原稿は30万枚にのぼり、寄贈・寄託された古文書も膨大な数になった。この事業は1955（昭和30）年に打ち切られるが、その資料は現在中央水産研究所と常民研で所蔵・公開されている。

敬三と常民研による独特の研究として、絵巻物の研究がある。1940（昭和15）年に絵巻物研究会を発足し、画家であり民俗学者であった橋浦泰雄にその模写を依頼している。戦争によってその大半を焼失し、研究も中断していたが、1955（昭和30）年に絵巻物の会として研究が再開される。その後、『日本常民生活絵引』の仕事が、村田泥牛、宮本常一、河岡武春らによって行われるが、その刊行を待たず、敬三は1963（昭和38）年に世を去ることになる。常民の生活にこだわり、しかもモノを徹底的に研究しようとした敬三の最後の仕事となった。

敬三が逝去した後、有賀喜左衛門理事長の下で1968（昭和43）年には『民具マンスリー』の発刊が始まり、1974年にはアチック50周年をきっかけに民具研究講座が始まる。しかし、アチックの主催者であった敬三の死は、財政的にも財団法人としての活動を厳しいものにした。その研究の継承と発展を目的として、1982年に神奈川大学に移管されることとなった。

これによって、アカデミズムの外にあって、民の学問として民俗学や歴史学、博物館などに大きな貢献を残したアチックと常民研の歴史は、大きな転換期を迎えることになった。神奈川大学日本常民文化研究所では、河岡武春や網野善彦などの努力によって、民具研究と漁業制度資料研究が継承されることとなった。

（４）国際常民文化研究機構

神奈川大学日本常民文化研究所は、前身の澁澤敬三が主宰したアチックミュージアムから継承した民具資料や漁業制度資料、フィルム資料などを所蔵、公開し、海をめぐる歴史と文化の研究を核としながら、民俗学と歴史学の学際的な協力関係のもとに研究を遂行するところに学問的な独自性をもっている。しかし、研究所としては、史資料の所蔵だけでなく、その学問的蓄積を生かして、より現代の学術に貢献していく努力が求められる。

その一つが、神奈川大学日本常民文化研究所と同大学院歴史民俗資料学研究科中国語研究科を基盤として採択された、21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」であり、2003年度から2007年度の5年間に数多くの有意義な研究成果をあげ

た。2008年度から、日本常民文化研究所の附置機関として非文字資料研究センターが開設され、非文字資料の世界的研究拠点形成を目指して研究活動を継続している。

さらに、2009年度から文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」に採択され、国際常民文化研究機構が発足した。機構は、日本常民文化研究所を基盤として、その漁業制度資料約30万枚、アチック写真や16ミリフィルムの映像資料、民族学振興会からの引き継ぎ資料など膨大な資料の蓄積が評価され、それらの資料の公開、共有を含めた研究活動を展開して国際的・学際的な共同研究拠点を形成することがその目的とされている。

機構の研究活動は、大きく3つに分類される。第一は、**所蔵資料の情報共有化**で、機構の第1業務と位置づけられる。前述した日本常民文化研究所の資料をデータベース化して、公開を進め、その共有化を推進する。

第二は、**プロジェクト型共同研究の推進**で、機構の第2業務と位置づけられる。このプロジェクトは、初年度に①海域・海民史の総合的研究、②民具資料の文化資源化、③非文字資料（図像・身体技法・景観）の体系化、④映像資料の文化資源化、⑤常民文化資料共有化システムの開発の5つのテーマで広く全国の研究者に対して公募した。その結果、①のテーマで「漁場利用の比較研究」「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」の3プロジェクト、以下②で「民具の名称に関する基礎的研究」「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」、③で「アジア祭祀芸能の比較研究」、④で「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」、⑤で「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」の合計8つの研究プロジェクトが採択された。のべ65名の共同研究者と11名の研究協力者（海外7名、国内4名）、76名によるプロジェクト型共同研究を推進している。

第三は、**事業運営の総合的推進**で、機構の第3業務である。機構運営の最高機関である運営委員会を中心として、共同研究のための研究会や国際シンポジウムなどを開催する。2010年3月27日・28日には、共通テーマ「海民・海域史からみた人類文化」と題した第1回国際シンポジウムを開催した。日本学術会議及び関係4学会の後援のもとに、27日は「漂うクジラ ―“ヒト”・“カミ”・“自然”共生の試金石―」と題し、C. W. ニコル氏「勇魚の人々」、秋道智彌氏「鯨墓と鯨供養を再考する」の基調講演のほか、ノルウェーやチリ出身研究者など5名の発表が行われた。28日には「海民社会と漁業―東アジア世界から―」と題して共同研究者や国際学術協定提携機関の中国、韓国の研究者を含めて10名の報告があった。

2013年度までの5年間、機構における共同研究拠点づくりの学術活動が続けられる。

（5）まとめ

常民研は、アチックから80年の歴史を経て、神奈川大学に移管して30年近くの歳月が流れている。その研究組織をめぐる人は、何回も入れ替わり、時代も大きく変化している。しかし、敬三の精神を現代に継承する一つの方法が、民具と海洋・海民文化をテーマとした共同研究拠点としての常民研といえる。国際常民文化研究機構は、アチックの精神を継承し、それを発展させる常民研の新たな方向性を示すプロジェクトとして期待される。

（文責 小熊 誠）